

## 浜のかあちゃん奮闘記

佐多岬漁協婦人部

日高涼子

### 1. 地域と漁業の概要

私の住む佐多町は、鹿児島県大隅半島の南部、本土最南端に位置し、東側は太平洋に、西側は東シナ海に面している。黒潮の流入で豊富な水産資源の回遊があり、根付資源にも恵まれている（図1）。

町内には佐多・佐多岬の2つの漁協があり、私の所属する佐多岬漁協は、南部に位置し、正組合員160名、准組合員169名、合計329名で、定置網・潜水器・延縄・すくい網・一本釣り・刺網・曳縄・養殖など多種多様の漁業が営まれており、平成8年度水揚量は453トンで、水揚金額は約4億円である。

### 2. 活動課題選定の動機

昭和36年、美容師であった私は、理容師の夫と結婚し理美容業を営んでいたが、田舎ではなかなか生計が成り立たず、昭和39年、夫は漁協の組合員となり、漁業で生計を立てる決心をした。もともと海の近くに生まれ、漁業は身近な職業であったが、実際就業してみると想像を絶するものであった。それでも木造の伝馬船造りに始まり、夫は船舶の免許、潜水器の許可を取得し、二人でイセエビ漁、トビウオ漁、トサカノリ採捕、瀬渡船となんとか生計を立てていた。しかし、昭和53年から仲間数名と定置網を始めたが、うまくいかず6年程で解散、60年に再開したものの、経営不振により赤字を出し、また、新船を購入したこともあり、多額の借金をかかえてしまった。

毎月の定まった収入もなく、定額の返済は大変困難であった。毎晩、家計簿をつけながら、やりくりで頭を悩ませていた。そのころ、私は定置網操業において魚の箱詰め等水揚げ作業には従事していたが専業主婦であった。

漁家経営への参画といえば仰々しくなるが、家計の手助けになる仕事を探した。魚は網にかからないとだめであるが、貝の収穫は確実であることから、家事の合間にもできる貝採りに精を出すことにした。

### 3. 実践活動の状況及び成果

佐多岬地先で採れる貝類は、アワビ、サザエ、トコブシの他にアナゴ、黒ミナ（ギンタカハマ）、カラス貝、カメノテなどである。

アワビ、サザエ、トコブシは禁漁期間がある上に、潜らないとならないため私たち女性にはなかなか採ることができない。また、アナゴ、黒ミナは値段は良いが、総体量が少なく場所を捜し出すのがたいへんである。

カラス貝、カメノテについては、スープにすると良いだしが出て味もおいしいので、家で食べる量をたまに採ることがあったが、商品としては一般的にまだ普及していなかった。そのため、採る者も余りおらず、ほとんど未利用の資源であった。市場では少しだけ出荷されることもあるが、低価格であった。他の貝と比較して、採取方法が容易で、効率も良いことから、カラス貝、カメノテを中心に貝採りをはじめることにした。

カラス貝は当時、キロ当たり100円程度で売買されていたが、この貝にはたくさんのフジツボ等が付着しているため見た目が悪かった。そこで私は、やはり見た目も大切であると思い、フジツボ等をひとつひとつ根気よく包丁で叩いて、きれいに取り除いてから出荷してみた。そうしたところ、良い時でキロ当たり700~900円の値が付くようになった。

カメノテは、最初無造作に木箱に入れて出荷し、キロ当たり300円程であった。苦勞して採ってきたわけで、もう少し商品価値を高めたいと思い方法を考えた。買う側の立場になってみると、木箱に入れてあるだけでは買いにくいだろうと、仲買が買いやすいようにきれいに洗い1キロずつ量り、袋に入れて出してみた。するとキロ当たり700~800円の値が付き、良い時は950円もした。

ちょっとした工夫で、今まで商品として目を向けなかったものの値が跳ね上がり、驚き・嬉しさと同時に、創意工夫が大事であることを実感した。その結果、予想以上の収入が得られるようになった。

カラス貝、カメノテを出荷するようになってから今年で8年になる。貝の収入は、年間を通して70万~80万円程になった(表1)。

貝採りの日数は、月に多い時で17~18日、少なくとも一週間程で、平均10日程になる。私の場合、夫や息子の漁の都合上、どうしても一人での行動であり、地磯から歩いて行ける範囲でしか採ることができない。遠い場所は、家から歩いて片道50分かかる。リュックサックに濡れた貝を15キロ背負って山路を歩くのは、本当に大変である。その貝を持ち帰り、夜3時間程かけてフジツボ取りをしている。しかし、自分が家計の一役を担っていると思うと、やりがいもあり、充実感も得られる。

貝採りをする組合員の中には船を利用する方がおり、収穫範囲が広いため採る量が多く、採る貝の大きさもひと回り大きい。私のように家事の合間にしか採れない、また行動範囲も狭い者にとっては、このような人達と同じように出荷しては相場は期待できないので、人が出荷しないときに出せるように海水につけたり、冷蔵保存したりして保存法を工夫し、出荷時期の調整をしている。

また、自分が出荷した貝の量・価格・自分と他人の採った場所等の情報はきちんと記録して出荷の参考にしている。家事の都合に合わせながら、人が採らない時に採ったり、値が安い時には採りに行かなかったりしている。

#### 4. 波及効果

カラス貝、カメノテを出荷する者は、私が始めた頃余りいなかったが、現在では12～13名程に増えた。ここ4～5年で女性たちも貝を採るようになり、漁協への貝による水揚が増加していった(表2, 図2)。特にカラス貝、カメノテの水揚金額は増加している(表3, 図3)。

そのため、漁協による「水揚実績優秀者」表彰において、平成6年より准組合員に対する部門が設けられ、私は第1号をいただいた。

貝採りをする准組合員の女性が増え、漁協の水揚増加に大きく貢献したこともあり、漁協も以前にも増して婦人部への理解と協力を深めてくれた。平成6年、漁協へ水産業改良普及所(現農林水産事務所)よりヒトエグサの試験養殖が持ち掛けられたところ漁協婦人部が事業実施者となった。

#### 5. 今後の計画と問題点

貝採りをする人が増え出荷を調整せざるを得なくなっている。漁協の助言及び自主的な申し合わせにより調整しているが、価格維持のため、出荷者間でよりしっかりした出荷調整が求められている。貝採りを始めた頃からすると、だんだんと資源が減少してきていることが良くわかる。小さな貝は採らないようにしている。資源管理について今後みんなで検討しなければならないと思う。

ヒトエグサ養殖については、普及所の助言、指導のもと一生懸命努力した甲斐があり、養殖に適した漁場とのことで、現在漁協が区画漁業権の免許申請中である。

ノリ養殖は女性の仕事としてはかなり重労働であり、冬場の作業でもあり危険を伴う。労働環境の改善を図っていきたい。

軌道に乗るまでは大変な道のりであろうが、新たな未利用資源を探しつつ、貝採りと養殖の両立を目指しがんばっていきたい。

私は、漁協婦人部の部長を任されている。漁協婦人部は集落ごと6支部あり、距離的にも離れているので、全体活動がなかなか難しいのが悩みである。今後は、貝採りと養殖が婦人部一体となった活動として展開できれば望ましいことであり、実現へ向けて一生懸命努力していきたい。

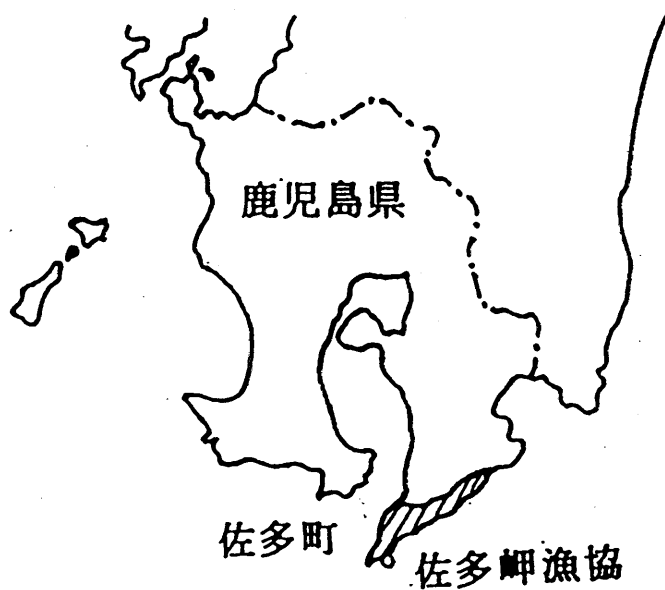


図1 位置図

表1 佐多岬漁協への水揚げ金額推移

年度	水揚金額
平成3年	646,707円
" 4年	641,584円
" 5年	736,779円
" 6年	562,650円
" 7年	756,921円
" 8年	837,196円

表2 佐多岬漁協における「貝」の水揚量・金額

年度	水揚量 (kg)	水揚金額 (円)
平成3年	4,866	3,123,772
" 4年	3,108	2,148,101
" 5年	10,847	5,820,372
" 6年	8,937	5,460,902
" 7年	17,807	11,328,279
" 8年	14,543	9,860,407

図2 佐多岬漁協における「貝」の年度別の水揚量・金額推移

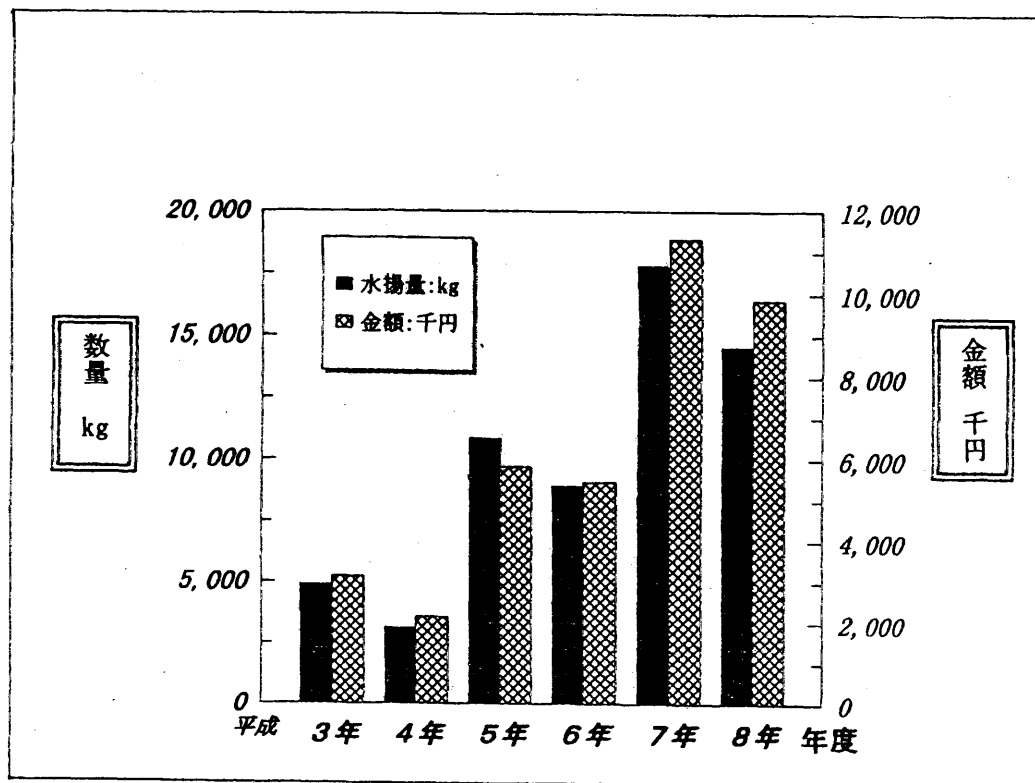


表3 佐多岬漁協における貝別の水揚量・金額

品目 年度	カラス貝		かめのて		その他	
	水揚量(Kg)	金額(円)	水揚量(Kg)	金額(円)	水揚量(Kg)	金額(円)
平成3年	2,586	1,191,937	731	371,109	1,549	1,560,726
" 4年	1,647	816,278	466	257,772	995	1,074,051
" 5年	6,114	2,741,822	3,385	1,800,495	1,348	1,278,055
" 6年	4,789	2,394,864	2,731	1,731,467	1,417	1,334,571
" 7年	10,848	5,483,916	6,404	4,387,479	555	1,456,884
" 8年	9,751	5,629,771	4,339	2,978,267	453	1,252,369

図3 佐多岬漁協における貝別の水揚量・金額の比較及び推移

